

今年のえとはひつじ。洋画家で岡山大大学院教育学研究科教授を務める泉谷淑夫さん(62)＝総社市三須＝は、羊をモチーフにしたシュールレアリスム作品「楽園の寓話」シリーズを約30年間発表

してきた。なぜ羊を選んだのか、何を表現してきたのか、代表作の解説を交えながら泉谷さんに聞いた。(江見肇)

岡山大大学院教授の洋画家・泉谷さん

## 羊めぐる冒険30年

「羊の画家」泉谷淑夫さんの誕生日には、学生たちから羊にちなんだプレゼントが贈られる。研究室に飾られた羊の飾り物もその一つだ



「羊を描き始めたきっかけは何でしょうか。」  
 私が羊を描いた第1号作品は、1986年の「Paradise」。当時、ある旅行会社のパンフレットを見て衝撃を受けたのがきっかけです。それは、たくさん羊たちが草をはむ写真で、一様に下を向いている寡黙な姿が異常に思えると同時に



「Paradise」(1986年)

「Paradise」(93年、第37回安井賞展入選)

「Paradise」(93年、第37回安井賞展入選)



「Paradise」(93年)

いずみや・よしお 1952年神奈川県伊勢原市生まれ。横浜国立大大学院美術教育研究科修了(日展の重鎮・国領経郎氏に師事)。中学校教師を経て94年に岡山大教育学部へ講師として赴任、2007年から教授。公募団体一陽会の運営委員、岡山県展審査員。受賞多数。2月27日～3月30日、安芸高田市の市立八千代の丘美術館(0826-3050)で「美しい驚き 泉谷淑夫展」が開催される。

### 人間と置き換え文明批評

は、緑の大草原にのぞく深淵の煙突から噴煙が湧き上がっている不穏さに気づかず羊たちが遊んでいます。例えば、原発のような問題がカムフラージュされた社会で私たちは暮らしている。絵に描いた深淵には、原発の廃棄物などがある。楽園の逆説(パラダイス・パドックス)です。このように一つの作品の中でたくさん羊を描いていますが、98年からはイエス・キリストと12人の使徒に擬した13匹の羊を登場させる作品も生まれました。

「羊を取材して気づいたことはありますか。」

ドイツの森(赤警市)や、教え子が嫁いでいった北ドイツ、英国などで取材しました。分かったのは、羊の姿がさまになる風景は欧州的な平原や丘だということ、全身焦げ茶色の羊もいれば、ぶち模様の羊もいて、いろんな種類がいるということ。それは人間の多様性と重なり、人間の姿と置き換えるのにふさわしい。羊と出合って、表現が深まった気がします。

「顕現」(2002年、第6回小磯)



「顕現」(2002年)

良平大賞展優秀賞)は、羊たちの前に巨大なカボチャが出現し、羊飼いが腰掛けています。背景に森や雲、カボチャなどモコモコした形が多くなった人から指摘されて気づきましたが、私はエネルギーが発露する形が好きなので。自然の持つエネルギーへの憧れです。昨年の「ENERGY」では、発射されたロケットの煙がモコモコとカボチャの形になり、羊たちの形がそれに同化しています。人工的なエネルギーの力に翻弄されています。

「エネルギーは現代的な問題です。文明はエネルギーに憧れ、人工的に獲得しようとしてきました。でも、東日本大震災で自然のエネルギーの力を見せつけられ、人間の限界を知ったのではないのでしょうか。今の日本社会はリーダーが不在で行き先が見えず、迷走しています。これからも迷える羊の姿を通して文明批評が続きそうです。」



「ENERGY」(14年)